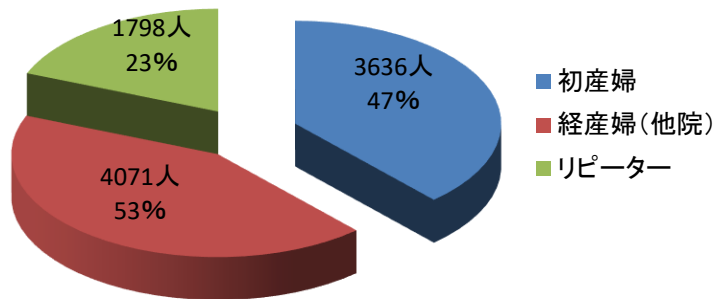


当院における分娩統計

2021.1

2000年(平成11年)11月の開院以来、2020年(令和2年)12月までの約20年間の間に7712名の赤ちゃんがお生まれになりました。今回はこれを総括し見直し皆様にご報告させていただくとともに、私どもの今後の診療指標としても活用してゆきたいと考えております。
ご来院いただいた多くの患者様には、心より感謝申し上げますとともにお子様の健やかなる成長をスタッフ一同願っております。

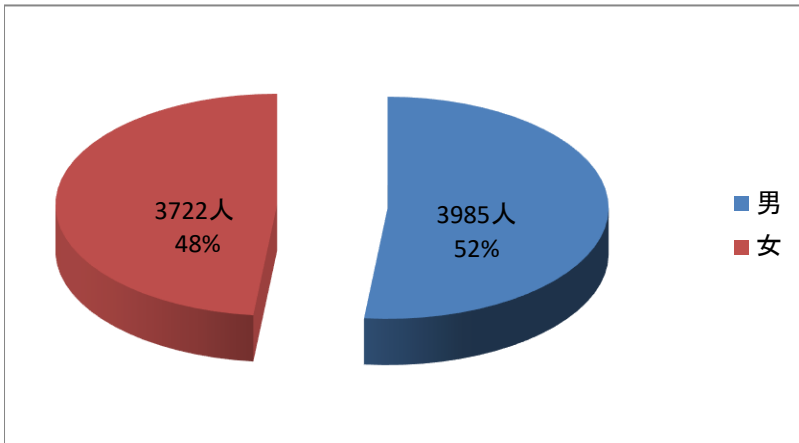
①初産婦と経産婦の比率(7721名)



1. 初産婦さんの経産婦さんの内訳

総数7712名の出産のうち、初産婦さんは3636名(47%) 経産婦さんは4071名(53%)と少し経産婦さんの方が多めでした。
経産婦さんのうち1798名(総数の23%、経産婦さんの44%)が前回も当院でお産をされているリピーターさんでした。
その中には、当院で5名のお子さんすべてを出産された方もおられました。また、4回とも当院で帝王切開での出産をされた方もおられました。
このように、繰り返しお越しいただけることは誠にありがたいことで、お互いの関係も密になりスムーズなお産や育児スタートに寄与したものと思われれます。

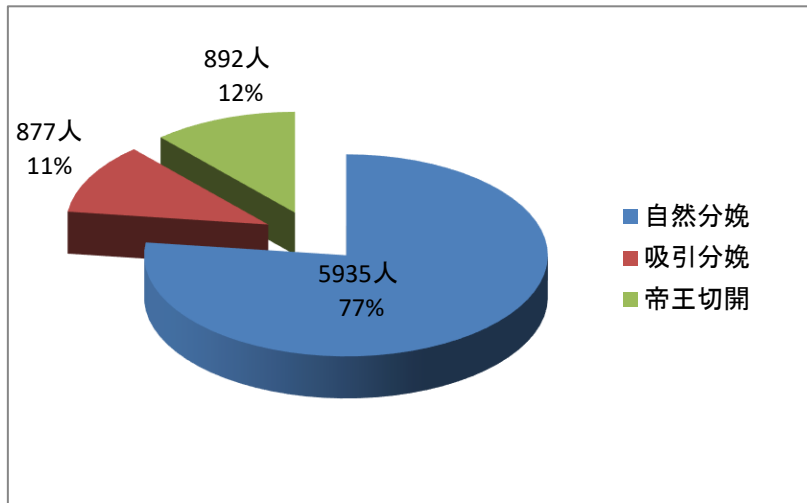
②出生児の性別(7712名)



2.出生時の性別について

3985名(52%)が男児、3722名(48%)が女児でした。昨年の全国統計をみても、男児:女児は52%:48%でしたので平均的割合といえると思います。最近では、性別を産み分ける希望をされる方も増えていますが、環境因子やさまざまな要因が性別に影響を及ぼす可能性があるものと思われます。

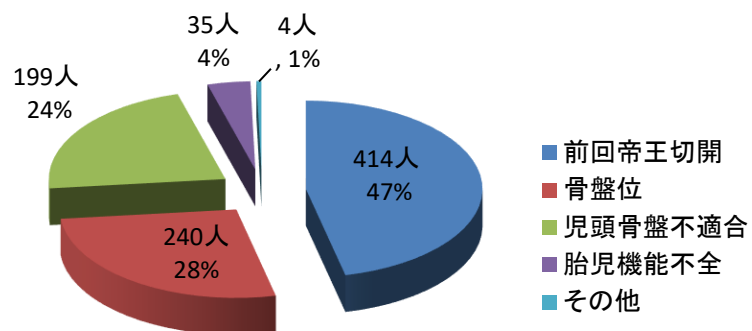
③分娩様式(7712名)



3.分娩様式について

自然分娩(経膈分娩)で出産された方が5935名(77%)をしめています。骨盤位(逆子)や前回帝王切開分娩をされているなどの理由で帝王切開で出産された方892名(11%)でした。微弱陣痛などのために胎児が出てこれない場合や胎児の状態が不安定なために分娩を急がないと危険なために吸引分娩を選択した方が877名(12%)ありました。2020年の1年間をみれば323件の分娩があり、その内自然分娩が217名68%、帝王切開が53名16%吸引分娩が53名16%でした。無痛分娩の増加に伴って吸引分娩が増加する傾向にありますが、詳細は無痛分娩の項を御覧下さい。

④帝王切開となった理由（892件）

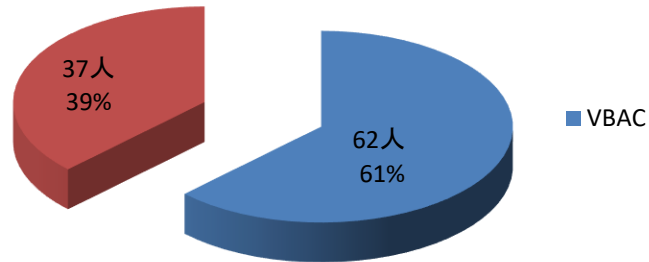


4.帝王切開となった理由

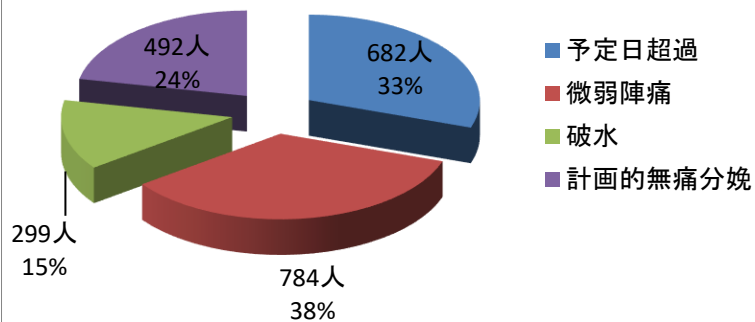
帝王切開総数892件の内、前回帝王切開をうけておられる方が414件（47%）ともっとも多くを占めています。これには、後にお示しするVBAC(帝王切開後の経膈分娩)が不成功に終わった389件も含まれております。次に多いのは、骨盤位(逆子)が240件(27%)を占めています。その他、児頭骨盤不適合(骨盤が狭くお産が困難な場合)で199件(22%)、胎児機能不全(お産の際に赤ちゃんの状態が不安定になることです)での帝王切開が35件(4%)ありました。

最近では、出産に関しては安全性がもっとも重視されるあまりに帝王切開率が上昇しております。VBACの適応が変わり、前回帝王切開の方は、次の出産時も帝王切開になる方が増えた為、当院でも帝王切開率は増えております。手術の必要性を正確に判断することは非常に重要でありますし、その選択も時によっては一刻を争うような場合もございます。そのような中でも、当院では妊娠分娩管理の充実により帝王切開率を少しでも下げれるよう努力して参りました。今後も当院での重要課題のひとつとして取り組んでいきたいと考えております。

⑤VBAC(99名)



⑥促進分娩の理由(2257例)



5.VBAC(帝王切開後の経膣分娩)

前回帝王切開で出産されていても、手術となった理由やその後の経過、また今回の妊娠の状況によっては経膣分娩が可能な場合があります。詳細は担当医にご確認ください。

当院では前回帝王切開で出産された方が414名おられ、その内**99名**(31%)の方がVBACをご希望になりました。しかし、ご希望通りに経膣分娩をされた方が62名(61%)で、残りの37名(39%)の方は帝王切開での出産となりました。

これらの方で異常のために帝王切開となった方は1名もおられません。現在は、以前に経膣分娩の経験がある方に限定させて頂いておりますので、ご了承下さい。

6.陣痛促進の現状について

当院では、原則的に自然陣痛を待ってお産をしていただいております。しかし必要があれば、母児の安全のためには陣痛促進を必要とする場合がございます。これまで、2257名(経膣分娩の内37%)に陣痛促進を行っております。その内訳は、陣痛が始まっているも微弱なためにお産が進行しない場合が784名(38%)と最も多く、次いで分娩予定日を過ぎても陣痛が始まらず、出産が妊娠42週を超える可能性がある場合が678名(33%)、破水後にもかかわらず陣痛がおこらない場合が299名(15%)となっております。

その他、計画的無痛分娩での陣痛促進を492例(24%)に行いました。以前と比較して、無痛分娩の為の陣痛促進が増加しております。一部には必要性が重複した例もございましたが、主な理由にかぎり報告させていただきます。

7.無痛分娩について

以前より当院では無痛分娩を行っており、これまで**761例**の実績がございます。

この際行う硬膜外麻酔は帝王切開時にも基本的には全例に行っており、当院では**891例**の実績となっておりますが、幸いにも麻酔に伴う副作用は発生しておりません。このような経験を踏まえ、平成23年より計画的無痛分娩に取り組んでいます。これは陣痛が始まる前に入院していただき、麻酔や陣痛促進の準備をしたうえで出産をしていただくものです。

この**計画的分娩**の開始以来**715例**の出産がございました。当初は分娩総数の**7%**に過ぎませんでした。一昨年は**42%**、昨年は**51%**と増加傾向です。一昨年度より、自然陣痛の発来を待って無痛分娩を行う**待機無痛分娩**も始めました。

昨年度ご希望されたのは**14名**(無痛分娩中**10%**)の方でした。また陣痛開始後に急遽ご希望により無痛分娩を行った**緊急無痛分娩**の患者様も昨年度**8名**(無痛分娩中**6%**)おられました。計画無痛分娩では分娩促進の前日に入院して翌日に分娩誘発を行っています。

しかし計画的に入院していただいたうち、**初産婦さん**で**14名**(**28%**)が分娩誘発に2日以上かかりその半数の**7名**(**14%**)が一時退院となりました。**経産婦さん**では**3名**(**8%**)が分娩誘発に2日かかりましたが一時退院となった方はいませんでした。

無痛分娩では麻酔効果の為、陣痛やいきみ感がわかりにくくなったり力が入りにくくなったりすることがあります。

また陣痛そのものも微弱陣痛となることがあります。これらのことから分娩第Ⅱ期が遷延(初産婦さんで2~3時間以上、経産婦さんで1~2時間以上かかること)したり30分以上分娩が進行せず吸引分娩を併用することがあります。

昨年度は無痛分娩全体のうち33%が吸引となりました。吸引分娩率は初産婦さんで**44%**、経産婦さんでは**13%**でした。

当院で無痛分娩をしていない場合の**吸引分娩率**は**初産婦さん**は**10%**、**経産婦さん**は**4%**でした。このように無痛分娩を行うことで入院期間が長くなったり吸引分娩が増加したりということはデメリットだと思われれます。今後も入院時期、麻酔量の調整や

子宮頸管拡張法の工夫などにより、より無痛分娩のデメリットを減らしていきたいと思っております。無痛分娩を行う上で最も重要なことは安全であるということです。一昨年、無痛分娩の副作用報告がとり立たされたことを受けて、**無痛分娩を安全に行うための指針**を

掲載しておりますので、別途ご覧くださいませようお願い申し上げます。当院では今後も皆様のご要望にお応えできるよう、

お産の一つの選択肢と捉え、これからも取り組んでゆきたいと考えております。また、患者様絵のアンケートやスタッフによる鎮痛効果や出産の評価、または自己調節鎮痛に用いるポンプの使用状況等により無痛効果の判定も行っており、これらの結果についても随時皆様にご報告させて頂いております。ホームページにも掲載されておりますのでご覧くださいませようお願い申し上げます。

